

第2学年2組 国語科学習指導案

令和元年10月

場所：

授業者：

1 題材名 「徒然草」

2 題材について

(1) 題材観

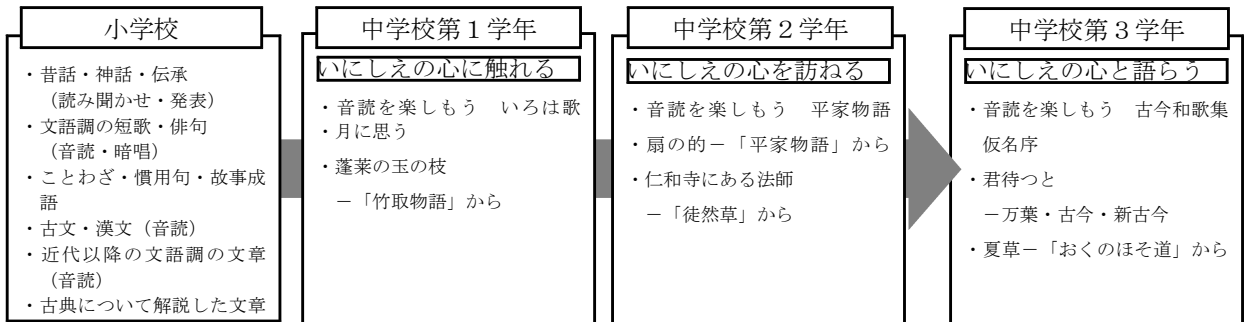
本題材は、「いにしえの心を訪ねる」という古典を扱った教科書単元の一題材である。本単元では、昔の人のものの見方や考え方に触れ、古典に親しむことをねらいとしている。

「徒然草」は古典の随筆文学の最高峰に位置するといわれる作品であり、教科書では、その序段と第五十二段「仁和寺にある法師」を取り上げている。

「仁和寺にある法師」は次のような内容である。「年寄るまで」（年を取るまで）石清水八幡宮に参詣していないことを「心憂くおぼえて」（残念に思っ）いた法師はあるとき決心して、ひとりで参詣する。年をとってからの一決心である。ふもとにある極楽寺と高良神社をみて、「かばかり」（これだけ）と思いこんで帰る。長年思いつづけた参詣を果たして、同僚に自慢せずにはいられない。自分以外の参詣人は、みな山に登って行ったが、自分は遊びにいったわけではなく、神へ参るのが本来の目的だから、山まで登ろうとはしなかった。お参りを果たした満足感と、お参りだけを大切に思うまじめさがうかがえる。遊びにいったわけではないから、山までは見に行かなかったと、同僚に得意げに語った法師だったが、石清水八幡宮は実は山頂にあり、法師が見たのは、石清水八幡宮に付属する寺と神社であった。石清水に参拝したことにはならず、山に登らなかったのは、決定的なミスだったのだ。ちょっとしたことにも案内者はいてほしいものだ（そうすればお参りできたのに）、という作者のまとめの一文が最後に述べられている。

このように、「仁和寺にある法師」は、説話的な出来事に内在する人間の意識や、生活上の問題を述べている。一人旅ならでの失敗による人間のおかしさ、先達の重要性などは生き方の問題として、社会にも通用する人間観・人生観が作品のテーマとして流れている。作者の考えが最後の一文に書かれており、読みやすく理解しやすい内容である。兼好法師の人間観察の鋭さにも目を向けられる作品であり、古典の随筆に親しむにふさわしいものと言える。

(2) 系統観



小学校の国語科の学習では、古典作品を音読する学習を主に行ってきた。中学校では、古典作品を歴史的仮名遣いに気をつけて正確に音読し、内容を深く読み取ることがねらいとしたい。また、各学年における古典を取り扱う単元名が「いにしえの心に触れる」から「心を訪ねる」「心と語らう」と変化していることも十分考慮し、学年を追うごとに古典学習が内容の深まりがあるよう仕組みたい。中学校2年生の単元名が「心を訪ねる」とあり、作者のものの見方や考え方にじっくり迫る学習活動を中心に据え、学習を展開していきたいと考えた。

(3) 生徒の実態

本学級は 落ち着いた学習に取り組める集団であるが、受け身の姿勢が強く、自ら求めてという主体的な学びの姿となると課題がある。特に発表など、自分の意見を言うことに対する抵抗が大きい。班での活動を多く取り入れ、活動そのものには慣れ、その楽しさ、意義は感じられつつあるようだ。そのやりとりが本質に迫るようなものであるかなど、まだ課題があり、「主体的・対話的な学び」を実践できる集団として、意欲を高めながら取り組んでいる最中である。

古文の学習に関して意識調査を行ってみたところ、以下のような結果であった。（20名回答）

①古文の学習は好きですか？

好き	3
どちらかといえば好き	12
どちらかといえば嫌い	5
嫌い	0

②古文の内容を読み取れますか？

できる	3
どちらかといえばできる	10
どちらかといえばできない	7
できない	0

また、古文を読んだり、学習したりする楽しさを聞いたところ、「今と昔の言葉の違い」「昔の人の考えを知ることができる」「今と昔を比較できる」などが挙げられており、古文ならではの魅力を感じることができているのがうかがえる。このように古文の学習に関しては、前向きに取り組んでいると言える一方で、消極的な回答に目を向けた場合、①と②の結果がほぼ相関関係にあるように、古文の内容の読み取りに関する自信のなさが古文学習への意欲が持てないことにつながっている実態もうかがえる。現代語訳を手がかりにしながら、内容の読み取りに抵抗をなくし、自信が持てるような手立てをとっている。

(4) 指導観

生徒の実態を受け、本題材では、以下の点に留意して指導を進めたい。
ア 本校の研究主題との関連

【本校の研究主題】 主体的に学び合う生徒の育成を目指した授業の創造
～「主体的・対話的で深い学び」を支える ICT 活用を通して～

視点1 課題設定の工夫

- 興味・関心を高める工夫
 - ・『徒然草』の面白さ、魅力を紹介（発信）しよう。」という題材を貫く学習課題を設定することで、主体的に学習に取り組ませる。
 - ・問いに対する生徒自身の意見を取り上げながら授業を展開することで、主体的に考えられるようし向ける。
- 見通しを持たせる工夫
 - ・学習計画表を持たせることで、題材を貫く言語活動を常に意識でき、題材全体の学習の見通しを持つようにする。
 - ・「や」やってみよう（個人思考）、「ま」周り学び合おう（集団思考）、「え」得たことを整理しよう（振り返り）という学習過程をパターン化し、見通しを持って主体的に学習に取り組めるようにする。
 - ・古文の学び方を示し、同じような学習の流れを経験させることで、読み取りの技能や学習のパターンをつかませ、より主体的な学習ができるように支援する。

視点2 対話的な学びの工夫

- 考えるための技法の工夫
 - ・学校全体で取り組んでいる「考えるための技法図」を活用する。特に、班での話し合いの場面では「構造化する」図を活用し、意見をまとめやすくする。また、結論を裏付ける理由を整理する際に、「理由付ける」という技法を活用する。全体で思考を深める場においては、「つまり」の接続詞を多用し、「抽象化する」技法を意識して使わせたい。
 - ・①「もう少し詳しく教えて」②「なぜ、そう言えるの？」③「つまり、どういうこと？」という思考が深まる質問を設定し、日常的に活用することで、個人内、グループ活動での活発な対話（やりとり）を促す。
 - ・話し合いや発表の場面では、関連を意識させた発表、自分の考えとの比較を意識させることで、あらゆる場面で思考を深めさせる。
- 学習形態や場の工夫
 - ・座席や班編制を工夫し、対話ややりとりを充実させる。
 - ・班での発表の際にタブレットPCを活用することで、意見の比較を容易にできる場を示し、思考を深めさせたい。

視点3 評価・振り返りの工夫

- 振り返り時間の設定の工夫
 - ・毎時間の振り返りでは、「わ」わかったこと（深い学び）「が」がんばったこと（主体的）「とも」ともだちから学んだこと（対話的）などの視点で振り返りを行わせる。
- 学習活動の記録・データの活用
 - ・ノートを三段に分割し、考えて書くノート作りを意識させる。

イ 道徳教育との関連

- ・古文を学習し、昔に書かれた文章が今なお残っていること、昔の人の考え方から学ぶことを通じて、優れた伝統の継承について考えさせたい。（C（17））
- ・作者の人間観察の中に、人間の欲深さや弱さ、失敗を認める寛容の心を感じ取らせたい。また、学習活動の中で、多くの考え、意見に触れることで、いろいろなものの見方や考え方があることを理解させ、そこから謙虚な学びにつなげさせたい。（B（9））

ウ 人権が尊重される授業づくりの視点

学習形態としてグループ活動を多く取り入れる。多様な意見が出る発問も取り入れ、多くの意見があることで、考えが深まることを実感させ、他の意見を尊重する姿勢、態度を養いたい。
また、だれもが使いやすい質問を示しておくことで、わからない生徒が声を発しやすい環境を整え、全員が積極的、主体的に学習に参加できるようにする。

3 題材の目標

- (1) 「徒然草」の世界観や作者のものの見方や考え方について関心を持ち、面白さや魅力を交流し、紹介（発信）しようとする。（関心・意欲・態度）
- (2) 文章に表れている作者のものの見方や考え方を理解し、知識や経験と関連付けて自分の考えをもつことができる。（読むこと）
- (3) 古語の意味や表現の特徴に留意して音読することができる。（言語についての知識・理解・技能）

4 題材の評価規準

観点	国語への 関心・意欲・態度	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
ア 「徒然草」を読み、内容や表現の仕方について感想を交流すること。			
評価規準	① 自分の経験と重ねて、描かれた内容を読み取ろうとしている。 ② 「徒然草」の世界観や作者のものの見方や考え方に触れ、「徒然草」の面白さや魅力を紹介（発信）しようとしている。	① 文章に表れた作者のものの見方や考え方について、自分の知識や経験と関連付けて感想を持っている。（エ）	① 歴史的仮名遣いや言葉遣いに留意して音読している。（ア（ア））

5 指導計画及び評価基準（5時間取扱い）

次	時	学習活動	関	読	言	評価基準及び評価方法
1	1	「徒然草」の面白さ、魅力を紹介（発信）しよう。 ○「徒然草」について知り、序段の古文を読み、表現に慣れ、親しむ。 ○学習の見通しを知りどのような力を付けようとしているのか確認する。	○	○	○	関心・意欲・態度② （観察・ノート） 「徒然草」に興味を持ち、これからの学習に意欲を持ち、序段を音読している。 知識・理解・技能① （観察） 歴史的仮名遣いに気をつけながら音読し、表現に慣れ親しんでいる。
2	2	○第十一段「神無月のころ」の原文と現代語訳を読み、作者のものの見方や考え方を読み取る。	○	○	○	関心・意欲・態度① （観察・ノート） 「神無月のころ」の古文の内容を自分の経験を重ねて読み取ろうとしている。 読む① （ノート） 「この木なからましかば」という作者のまとめから、作者のものの見方や考え方を読み取って、まとめている。
	3	○第五十三段「仁和寺にある法師」を読み、内容を捉える。 ○このエピソードからどんなまとめが考えられるかを書く。	○	○	○	関心・意欲・態度① （観察・ノート） 「仁和寺にある法師」の古文の内容を自分の経験を重ねて読み取ろうとしている。 読む① （ノート） 「仁和寺にある法師」のあらすじを捉え、説明している。 知識・理解・技能① （観察） 歴史的仮名遣いに気をつけながら音読し、表現に慣れ親しんでいる。
	4 本時	○「仁和寺にある法師」に表れている作者のものの見方や考え方を読み取る。	○	○	○	関心・意欲・態度① （観察・ノート） 「仁和寺にある法師」の古文の内容を自分の経験と重ねて読み取ろうとしている。 読む① （ノート） 「少しのことにも先達はあらまほしきことなり」という作者のまとめから、作者のものの見方や考え方を読み取って、まとめている。
3	5	○他の章段について、原文や現代語訳を読み、内容や作者のものの見方や考え方について考える。 ○「徒然草」の面白さ、魅力を書く。	○	○	○	関心・意欲・態度② （観察・ノート） 「徒然草」の他の章段にも興味を持ち、「徒然草」の面白さ、魅力を紹介（発信）しようとしている。 読む① （ノート） これまで読み取った「徒然草」の面白さ、魅力をまとめている。

6 本時の学習

(1) 目標

「仁和寺にある法師」の作者のものの見方や考え方を読み取ることができる。(読むこと エ)

(2) 展開

過程	時間	学習活動	指導上の留意点・評価	備考	
導入	3	1 「仁和寺にある法師」を音読する。	・ペアでの確認で、読みを徹底させる。	電子黒板	
	5	2 前時の復習をする。	・前時まで「わかったこと」を生徒自身に説明させ、あらすじを押さえる。	電子黒板	
展開	5	3 本時のめあてを確認し、課題をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> 文章の種類(随筆)から、作者の思いがあることを確認し、作者のまとめの一文「少しのことにも先達はあらまほしきことなり」とその意味を押さえる。 前時に自分(たち)が考えたまとめを示し、作者のまとめと比較させ、疑問を持たせる。 	電子黒板	
		(本時のめあて) 作者のものの見方や考え方を読み取ろう。			
	17	4 最後の一文について考える。 (個人思考→集団思考)	<ul style="list-style-type: none"> 自分(たち)が考えたまとめ(ものの見方や考え方)の共通点を出させる。 →法師に向けて言っている。 法師を責めている。 自分(たち)のまとめと比較して、最後の一文について考えさせる。 前時の学習(法師の性格)も踏まえて考えさせる。 全体での思考の場(班の発表時)にはタブレットPC、電子黒板を用い、班の意見を比較できるように画面に示すことで、活発な思考を促したい。 	タブレットPC 電子黒板	
10	5 作者のまとめについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> 結論(作者のものの見方や考え方のまとめ) →根拠(本文)、理由という書き方を用いさせる。 「作者は」という出だしにすることで、作者のものの見方や考え方をまとめるということからずれないようにする。 	ノート (まとめカード)		
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【言語活動】(設定の意図) 課題に取り組む中で、作者のまとめの一文について深く考え、作者のものの見方や考え方に迫らせる。</p> </div>			
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>評価【読む能力①】 B基準 作者のまとめの一文について考え、作者のものの見方や考え方を理解してまとめている。 A基準 (例) 作者のまとめの一文について考え、作者のものの見方や考え方を理解して、自分との違いを挙げながら、まとめている。 <B基準に達していない生徒への手立て> 作者のまとめが法師を責めない終わり方になっていることを一緒に確認し、それをまとめさせる。</p> </div>			
整理	5	6 まとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> 作者は法師を責めるのではなく、教えてくれる存在の大切さを述べている。最後の一文があることで、単なる法師の失敗談に終わらない、誰もに通じる教訓になっていることを確認する。 現代でも通じる話であることを実感させ、古文を読む面白さを感じさせたい。 「徒然草」関連の本を紹介し、読書意欲を喚起させたい。 作者のまとめに対する捉え方の変容から学びが深まったことを実感させたい。 		
	5	7 振り返りをする。	・「わがとも」の視点で振り返りをさせることで、本時での学びを実感させる。	学習計画表 (ノート)	